

中に説かれたる所ある無し、聖書にて教ふる所は重に一統に普通なる件々に屬す。人々の箇身は滅し了り、單に人類の一般知覺なる者のこらんと説くが如きは(其謂ゆる知覺は如何なる者にもせよ)、最も虚妄の甚だしき者と謂はざるを得ず。聖ペテロは永遠に聖ペテロなるべく、聖パウロは永遠に聖パウロなるべし、各々己れの連續せる經歷を以て立てり、何人も之を初より彼等と共にする能はず。白き石の上に新らしき名を記して之を手へん、之を受る者の外に此名を知るもの無し(黙示録二章十八)に見えたる約束の中には此事含まれり。併し乍ら各箇の靈魂の歡喜は進んで一同の歡喜とはならん。此世に於てすらも基督教徒は十分一體に結織せられれば、相互の苦樂によりて一同に動かさる。但し同情躰恤は此土においては故らに努めて辛うじて發する者にして、相互に最も親しき人々の間においてすらも尤も不完全なる者なれども、彼の世にては天性自然にして且一統普遍なるべし。今は基督教徒の一致合躰は信仰と望の件なれども、彼の日には實境となりて心に感ぜられ且目に視らるべし。愛は聖三位間に行なはるゝごとき強き且満足なる狀にて此靈魂より彼靈魂に出入せん。此世にて信任を碍ぐるごとき特別の事情は悉く掃ひ去られん。心は相互にむかひて全く打開きてあらん。最はや虚妄の遠慮を以て一々の思想および言行を隠すこと無からん、——「神の名かれらの額に在るべし」(黙示録二十二の四)。

若し天にて尙箇々の身位の保たるゝ者ならば、被救贖者中には無差別に福祉の平等なるには非ずして不平等(上下大小等)もまた尙必ず存せんこと明らかなりとす。福音書中なる譬喩にては各箇の勞役者は同一の報を受領すと稱す、是れ皆その靈魂を救はれ、皆その福祉に堪ふる限り福せらるゝに因てなり。然れども斯く救はれたる靈魂は尙其間に彼此遙かに相異なれり、——固より罪

を脱したる點にては異なるに非ず、罪は皆ひとしく脱したれば也、其異なるは人品の淺深に於てし、力の大小に於てし、能變の多少に於てし、能容(容受の量)の高下に於てす。皆ことごとく榮を受く、而して各々他の榮を羨やむ無くして己れの榮を悦ばん、然れども萬人の榮はすべて同一なるを得ず(哥林多前書十五の四十一)。例へば初より一度も身を玷けがさいりし者の榮ありて、夫の洗ひ淨められたる悔悟者の榮とは永遠に相甄別せらる(黙示録十四の三、四)。道徳上の品格に於て然るが如く、智力上の品格に於ても亦然りとす。無知識なる人々の榮あるべく、學識家の榮あるべし。固より單に博識なるの事はさのみ多とするに足らず、此世にて第一なる者の中にも彼處にて最後となる者多からん、又最後なる者にして第一となるも少なからじ(單に機會なきがために最後となりたるにもせよ)。されど生來の志向および匪勉たる修養は必ず其相當なる潔成と完成とを蒙むらん。是の如く、凡そ其區別に於て物質的なる、屬地的なる者は悉く謝し去れども、男女の別、國民の別等もろもろ靈魂の本躰に異同を生ぜる區別は全くは滅却する能はず。此世にて靈魂と靈魂を親密に結びつくる繫つ練——例へば夫と妻、母と子、友と友の繫練の如き者——は、其境界や事情こそ變はれ、凡そ内部に屬する、永遠の價値ある者を保ちて失なはず、其結び連ぬる所の人々の榮とともに榮化せんとす。地上に於てすらも、斯る關係は滯りて進まざる者にあらず、年々に其外部の狀相を變じ來る。例へば馬利亞がイエスに對する様子、及びイエスが馬利亞に對する様子は、ゴルゴタにてはナザレに於るに同じからざりき、況んや今に於てをや、其同じからざること愈々大いなりとす。然りと雖も、馬利亞が天に於てイエスに於けるは他の聖婦人に毫も異なるなしと思ふが如き、彼女は其嘗てイエスの母たりしことを單に過去の一奇夢として記憶せ

んのみと思ふが如きは、吾人が天性自然に忌まんと欲する思想たる也。

千差萬別なる靈魂の間に完全なる相互の關係ある以上は、統轄と服従との觀念なくんばある可らず。榮化したる教會が寂寥たる景色を呈するエデンの園とはせず、一箇の大都會、「新しきエルサレム」(黙示録二十一章二節)として、我等の前に描き出されたるは、則ち斯る觀念を吾人の胸中に薦むる者とす。我等の主は比喩語を以て諭したまはく、我が十二使徒は其新イスラエルの「十二の支派を鞠かん(即ち治めん)」と(馬太十九の二十八)。基督は又曰たまはく、人々は其地上における信任を全うしたる度にしがひて、或は十邑を宰どらしめられ、或は五邑を宰どらしめらるゝと(路加十九の七十九)是の如く。善行は更にまた善行をなすの機會を與へらる。萬人ことごとく失墜の憂なき多福の境界に於ては、斯る宰治者たる靈魂は其權下に置かれたる衆靈魂を如何様にして治むるやは、之を揣摩せんとするも全く心力の及ぶ所にあらず。但し其方法は如何なるにもせよ、少くとも、其宰治はキリスト自身の宰治に彷彿たる者ならんことは確かなりとす、——即ち愛を以て守り、温和謙讓を以て衆のために役ふるの治道なるべし(路加二十二の二十五、二十六)。——王法を以て世を治むるに當りて教法をも均しく尊ぶの政躰なるべし(黙示録一章六節)。

第七節 意ふに夫の此世にては選ばれたる者の中に列せざりしかども、さりどて棄られたる者の中にも位めせしむる能はざる人々につきて言はれたる所を此に一考して然らんか。特別なる意味にて之を言へば、拯救は單に教會に屬する者のみ、然れども使徒の語を按ずるに、或る他の

意味にては是亦教會以外の者にも屬す(提摩太前書四の十)。聖ヤコブは基督教徒を稱して受造物中の初果(其造る所の物の中にて初に結べる果、聖雅各書一章十八)といへり。既に初果といふ以上は後に又幾分か刈いるゝ所の者なくんばあるべからず。彼の刈入は終には如何に廣かるべきかは知るに由なし。然し乍ら其中には凡て彼の虚妄なる信仰、異教の迷信、無情の哲學等の中にありながら、人たる名に愧ざる生活をなさんと務め、利己の念が指揮するよりは更に善き更に親切なる情願を以て世にながらへんと試みたる人々を悉く含むと斷定するには毫も困難あるを見ず。斯の如く我等の主は其自ら萬國民を審かんとする事、——即ち猶太人たる若くは基督教徒たる選民の範圍外における一切の人類を審かんとする事を説きたまへり。選ばれたる人々を審く尺度は夫の「童女」と「千銀」の譬喩に見えたる如く高しと雖ども、不明の動物のごとく其審判者の前にあつめらるべき萬國民(馬太二十五の三十二)を審くの尺度は單純なる仁道なるべき而已。彼等々々もし進んで困苦者を矜恤みたるならば、救はれん。斯る人々も、我等とちなじく、決して其善功を以て罪過を贖ひたるにあらず、其奉ずる律法や宗派の力によりて救はるゝにあらず。イエス、キリストは彼等の救主なり、彼等の行爲は彼等がイエス、キリストを信するの萌芽を有せるを明らかにす。彼等は誰に心を傾むけつゝありしかを知らずと雖ども、イエス、キリストに心に傾むけつゝありしなり。彼等は未だイエスの性質を分有せざれども、イエスは既に彼等の性質を分有したまへり、——彼等は斯く其眞に人たる地位(身分)を固持(主張)しつゝ、知らず識らずの中永遠にイエスに連なれる者となりぬ。彼等は「眞理に屬せる者」なり、而して己れが聽きて順がひし「聲」はイエスの聲なりしことを曉りて驚ろく(約翰十八の三十七)。何にまれ眞に人間的な

る物はことごとくキリストに屬す、而してキリストの救ふ所となる。何人にまれ一たび人間にして終に之を失なひたるあらば、斯る人は是れ神に似んことを拒みつゝ、遂に神の影像を帯ることを止め、斯くして彼は己れを眞に人たらしめたる所の徳を身内に滅し去れるに因て然るなりと我等は敢て信ぜんとす。然し乍ら窺ひ知られぬ此世にて神の攝理もて暗中に遺しおかれたる人々が後俄かに一躍して神の選民と同等の高さに達せんことは有るべくもあらず。救はれたる人々の中にも尙内庭漢と外庭漢とはあらん。教會に於ては此時にも尙は彼の未だ全くは教會に入らざれども教會に賛成を表しつゝあるが如き人々を教化するの傳道を要せん。萬の國の民この光に藉て歩まん、地の諸王おのれの榮と尊貴とを以て此の城に來らん(黙示録第二十一章二十四節)。想ふに、地上にてキリストの十字架を與かり擔ひたる人々は世々代々他者に先だちて嚮導をなしゆかん、而して永遠なる福音の勝徳妙理を萬世までも啓示するの手段とならん歟。

第八節 救はれたる者の福を考ふる時には、之が怖ろしき反對として淪亡者の禍に眼を轉せざるを得ず。本問題は其れ自身に困難なる者なるが、亦近今の爭論に由て均しく困難なる者とせられたり。最も慎重なる講究を要する事件なる者が却つて放肆なる舞文脩辭の街耀場とはせられぬ。されば餘事においては基督の弟子たらんと欲する人々も、地獄の點においては基督に悖らんとするが如き奇觀なきに非ず。如何となれば、其實本件において教會の教説を形づくる最も明瞭なる最も森嚴なる語は福音書中に記るされたる我等の主自身の語なれば也。淪亡者の状態は如何なるかを知らんと欲せば、天國の福祉を構成する件々の反對を掲げ出せば足

りなん。完き健全と内部の一致あるに引かへて、地獄にては「魂と軀とを滅ぼす」と基督は宣まひ(馬太十の二十八)、而して蛆が其腐れる軀を常に食ふといふイザヤの語(以賽亞書六十六章二十四、馬可九章四十八)を引きたまへり。義人はキリストを直ちに見かつ知りて永生を樂しむに引かへて、死者は「第二の死」に入らざるを得ず(黙示録二十一章八)、此第二の死を聖パウロは「主の面と其勢の榮光より離れて限りなく亡ぶる罰」と稱す(帖撒路尼迦後書一章九)。基督が馬太七章二十三節にて「其時我かれらに告げ我嘗て爾曹を知らず、我を離れ去れと曰はん」と宣まひしは、此事を教へたまひし者とす。諸聖徒が棲息し君臨する完全なる新世界とは反對にして、淪亡者が圍繞せらるゝ所は、(基督の説きたまへる教に依れば)唯これ「地獄の火」のみ(馬太五の十二)、「爐の火」のみ(同十三の四十二)、「外の幽暗」のみ(同二十五の三十)。聖徒は無礙の愛をつくして相交はれども、淪亡者に附き纏ふ者は怖ろしと言はん力なし、「罰せらるべき者よ、我を離れて惡魔と其使者の爲に備へたる熄ざる火に入れよ」(馬太廿五の四十一)、「我かりいれの時まづ稗子を扱あつめて焚んために之を束ね、麥をば我が倉に收めよと言はん」(馬太十三の三十)。

本件に關する福音の教に對して呈出せられたる異議は大抵は是れ神の愛もしくは義を傷つくるが如くに見ゆる教説に抗辯する者とす。然し乍ら其抗辯せらるゝ言語および思想は、是れ一統教會に於て古來決して固持し若くは主張したる者に非るを奈何せんや(該教會の教師中には或は教會に於て固持すと信じたる者もあらんとは雖も)。刑罰は弱なしといふ基督の教(馬太二十五の四十六)を甘心して容るゝことを得る前には、先づ其刑罰の加へらるべき人物の何たるを審かにせ

ずんばあるべからず。先づ此永刑は十分に之に當る者にあらざれば加へられじと絶待的に確信して可なるべし。何如なる人が之に當るやは吾人の決断すべき限りに非ず、如何となれば吾人は何人が幾何の恩恵を興へられて如何ほどまで之を拒みたるや等の事を知る能はざれば也。我等は得て固く信ず萬人のために死したまへる基督は何人をも永刑に當らざる者を強て罪に定めはしたまはじと、而して時いたらば、人々のおの基督の興へたまふ宣告の至當なるに甘服せん。淪亡する者は或は「多し」ともいはるべく、或は「少なし」とも言はるべし、是れ多といひ少といひ俱に比較上の稱なれば也(路加十三の二十三四)。但し多きにもせよ少なきにもせよ、彼等は淪亡ん、是れ彼等が淪亡ぶべく預定せられたるに由るに非ず、神が彼等を選ぶことを欲したまはざりしに由るに非ず、神の靈が彼等と「争ふ」ことを厭ひて十分に試みず棄てたまひしに由るに非ず、彼等が其力に及ばざる標準に合する能はざりしに由るに非ず、彼等が福音の意味を誤解して誤解のために福音を排ぞけしに由るに非ず。凡そ淪亡する者は再三再四の警戒および幫助を顧みずして自ら己れの罪過を以て淪亡する者とす。彼等が淪亡するは其薄志弱行なるに由るに非ず、其想像力に乏しきに由るに非ず、又は其愚なるに由るに非ず、全く是れ彼等が悪なるに由るなり、——其心が彼等に訴たへたる時に之が口を箝せしめたるに由るなり、——其心の光を故意に打消したるに由るなり、——非なるを知りつゝも是を捨て、非を取りたるに由るなり、而して其之をなせるや一二回にあらざ、頑然として之をなしつゝ、終りまで増長しつゝ遂に諸能力——靈魂の生命たる信、望、及び愛に或は開發し得たらん諸能力——を胸中に滅絶したる也。彼等は惡をなす事に凝りて其志を決めたるが故に淪亡びんとす、已に惡に専らなるを以て、凡そ彼等に薦

むる所の善は却つて只是れ新らしき惡をなすの燃料とせられん耳。彼等は惡鬼のごとくに成れり、人の如くには非ず。

慈心の人々が屢々提出する議論——正義にして慈悲なる神は人々を其地上の行爲のために永遠に罰しつゝ行くことは能はずとの議論——に對する答辯は此に存す。生命は短かし、有限物の犯す罪が却て無限なる者也と言ふは過大の言のみ。然れば其罪行に全く不比例に刑罰を長くすることには安くんぞ正しからんや。然れども其實是は神の爲したまふ所にあらざ。神は嘗に此の如き不幸人衆の過去の行爲を稽へたまふのみならず、又彼等が現在の品性を稽へたまふ。彼等が如何なる者なるかを示し、又彼等をして其成れることき者たらしめたるは、兩ながら俱に是れ彼等の地上生活なりとす。神は彼等を地上の生活に照して處置したまふ。神は事實をば事實として處分したまふ、現に事實たる者を枉げて事實ならずとは視たまふ克はず。固より吾人が尙ほ試験の期中にある間は神は御手をひかへて遠かには賞罰したまはじ、若し遠に賞罰したまはじ、我等は悔改補修の機會を得る能はざらんとす。然れども試験の期の了るや斯く控ふるも益なし。地上にて執ねく輕んじ棄てられたる慈悲は或る他の處にても均しく輕んじ棄られん。試験の新生活を以て新たに發程點を淪亡者にあたふるも徒爲ならん、如何となれば彼等は無難に出發するを得んには、先づ其地上における生活の記憶をことごとく滅せられ、該生活が靈魂に及ぼしたる結果をことごとく塗抹せられずんばある可らざれば也。但し然る時には其人は舊と同人に非ず、只名ばかり同一なる而已。然のみならず、神もまた過去を滅却するが如き隨意の處置を施すを得じ。或ひは又人もし地上にてもあれ、バラダイスにてもあれ、天國にてもあれ、其かつて生前に形づく

りたる品性を以て、再び新たに生活を始めしめられたらんに、只これ其新舞臺に於て同一の舊藝を演せん耳。勿論もし人の品質が此世にて十分に顯はるゝの機會なかりし如き場合においては、神は必ず之に與ふるに或る他の機會を以てしたまふならん、然れども心腹腎腸を百發百中のに察したまふ者より之を見れば、此世の生活は十分の試練となすに足れり、而して神は賞するに於ても罰するに於ても、其人が只一たび爲したる所の事を賞し或は罰したまふにあらず、其行を以て今現に其善人たるを若くは其惡人たるを顯はしつゝある人を賞罰したまふ也。

是に由て觀るときは、淪亡者の罰は人間の法律の刑罰の如き方便には非ざること明らかなるべし。人間にありては、服従を保せんために規定す某法律規則を破る者は若干の罰金、若くは幾歲月日の禁錮、若くは幾十百の笞杖に服すべしと。此制たるや全く人爲の便法なり、而して其刑を自由に緩減すべき權力は或る處に宿れり。然れども道德界においては全然これと異なり。酒狂者或ひは偽善者たるの刑罰は幾何の日數を地獄に過すの事に非ず、幾百度の火熱を以て苦しめらるゝの事にあらず、酒狂者たること若くは偽善者たること即ち其刑罰たる也。其刑罰は物質法(物理)のごとくに行なはる、而して各人箇々の場合に最も綿密公正に相應じ、頑硬の大なる者は多く苦しみ、頑硬の小なる者は少しく苦しむ。是すなはち地獄の苦惱を形成する事物にぞある。要するに笞杖若くは苦役若くは懲役年限は或は隨意に緩減せらるゝを得ん、然れども何物か能く人にむかひて其人の其人たる所以を緩減するを得んや、況て其所以にして其人が尙も固着して離れざらんとする者なるに於てをや、何物か能く之を緩減せんや。敢て此法則が飽までも自動的にして、毫も神の靈知の施作を其間に挿むこと能はざらむといふ

には決してあらず。却つて神は罪に定めらるべき各箇の靈魂に己れの法を適用したまはんこと恰も救はるべき各箇の靈魂に其救拯を適用したまふ如くならんとは、言はまくも畏こき事ながら、然か信ずることを憚るべき理由あるを見ず。預言者の言語を以てすれば、淪亡者を焚くために火を燃したまはん者は神の氣息なりと云ふ(以賽亞書三十三章三十三節)。彼等が刑罰の大半は免かるべからざる結果として彼等に臨む者——即ち彼等が彼等たる所以の者——なりとは雖ども、彼等は或は自ら識ること無くして其彼等が彼等たる所以の者ならんとせんも知るべからず。然るに此事は神が許したまはざる所なりとす。彼等をして永久に自ら欺きてをらしめん事、——罪は何の惡結果をも持きたす者にあらずと思ひをらしめん事は、神の欲したまふ所にあらず。神は彼等に會得せしむるに彼等の行爲の眞性質を以てせんと定めたまへり。故に曰く、「我なんぢを戒めて其の罪をなんぢの目前につらぬべし」と(詩第五十篇の二十一節)。彼等もし其救主を苦しめたることの如何ほどなるかを知りて之を悔悟の中に學ぶを肯んぜざんば、或る他の道もて之を學ばしめられざんば有るべからず。然らざれば、我等は神が如何にして義の神たるを得るかを了解する能はず。人々の罪若た神の一身に對して獲たる罪にして、神の私望を碍たげたる者に止まりたらんに、然らば神或ひは永久これを慈悲もて不問に置きつ、彼等よしや尙神を苦しめて止まずとも、依然として尙も恩澤を之に施したまはんも知るべからず。然ども罪は世界に對する者、人類一般に對する者、罪人自身の靈魂に對する者、神が維持すべき永遠不易の正義に對する者なり、故に神は犯罪の靈魂をして是非とも正義法の威嚴と神聖とを認識せしめざるを得ず。是すなはち神が下だしたまふ應報なりとす。正義および神の正義といふ我等の觀念は、若し其中より賞

罰あるひは應報といふ觀念を除くならば、是れ聖書の中にて教へられたる正義に非ず。應報——即ち萬人に其正に當る所の賞罰を施す事——は正義の全体には非ざれども、其中の一大要素なり。凡そ賞罰を施す無き處にては、政は薄弱になり、且不道徳となる。是故に我等の主は選者の蒙むれる冤枉屈辱のために必らず報ずる所あらんと明言するを猶豫したまはざりき（路加十八の七）、聖パウロもまた同様の事を説けり（帖撒路尼迦後書一の六及び以下）、凡そ健全なる精神は皆其然らんことを悦ばん、而してペピロンが其罰せらるべき如くに罰せらるゝを見んことを喜ばんとぞ斷定せらる（黙示録十九の一より三）。

我等神を愛と考がふるども、其達する結果は同じからん、何となれば愛の目的と義の目的とは決して相反する能はざれば也。神は愛なりと曰ふども、決して神は各事および各人をひとしく愛したまふとは須臾も思ふべきに非ず。神は唯眞に愛すべき者を愛したまふ而已。罪の中には毫も愛すべき者なし、反つて憎むべき者あるのみ、——而して神は愛なるが故に、却つて罪を憎まざるを得ず。天使にもあれ人類にもあれ、故意に罪と同化する者あれば、それだけは神其の者を惡みたまはざるを得ず。サタン、及びサタンの同類は神の愛の外に自ら出づ、——否々寧ろ愛は、罪を處遇するにあたりてや、只これ憎惡の形にて現はれ得るのみ。愛は淪亡者のために獨り例外をなすに非ず（獨り淪亡者を度外に放棄するに非ず）、却つて其正常の道に於ては彼等を顧りみて誘導するを怠たらず、其彼等を厭惡嫌忌憤患するは則ち他人のためになると同じく又均しく彼等自身のためにする者とす。地獄と其苦惱は愛の働きの最終手段なり、其が此手段を用ふるや最も深き悲歎を以てすと雖も、また斷乎たる堅志と満足とを以て之を成す、如何となれば靈魂が斯る惡逆

點に達したる時には、斯く之を處置するを最も義しき、又最も親切なる法とすれば也。是より外なる處分法は皆彼等に害を蒙むらさんを知るべからず、彼等あるひは神をして彼等に福をなすを得ざらしめたらんと雖も、神は彼等に害をなすを欲したまはず。今日においては想像するだも難けれども、天上に於ては至慈の母といふとも其子が神の宣告に由て淪亡るを見て唯に心服せんのみならず、又これが爲に感謝せんすとす、而して言はん、「あゝ主よ、爾は慈悲ふかい哉、各箇の作業に循がひて報をなしたまへば也」と（詩篇六十二の十二）。

此事にして若し眞ならば、而して地獄もし淪亡者の居るに最も好き處ならば、淪亡者は該處より永く釋き放たれまじき歟、是れ彼等のために不利なる地に彼等に移す者なるべければ也。彼等の刑罰は永遠に續くべきかと問はるゝならば、教會にては唯答へて曰はんのみ、——神は之に際限または終あることを我に告げたまはざりし、而して神が告げたまはざりしことを我は言ふ能はずと。キリストが用ひたまひし eternal (無窮) とする語は everlasting (永遠) と全く同じき者にあらざ、是れ時に於ての限りなき連續をいふに非ず、時(光陰)を超越したるを謂ふ。是れ或ひは或る場合において一定の時限を表すとしも考がへ得られん、随つて be-long (世の極み) としも或は譯されん。唯注目すべきの點は我等の主が同じ稱呼を同じ關係にて用ひ、以て被救者と淪亡者とを均しく描寫したまひたるの事なりとす。生命もし無窮 (eternal) ならば、刑罰もまた無窮なるべし。此語もし刑罰に一定の時限を定むるならば、また生命にも一定の時限を定むる者と謂はざるを得ず（馬太二十五の四十六）。想ふに今まで終盡なきの時を表すと信ぜられたる若干の文句は或は他様に解釋せらるゝを得ん。例へば我等の主が「彼處に入る者の蛆つきず火きえず」（馬可九の

四十八)と言ひたまへる如きは、是れ窮盡なきを謂ふよりは寧ろ間斷なきを謂ふ者とす。且又二三の語句に於ては限界の或は達せられんとの思想を鼓舞する者あるに似たり。「爾は分蘆までも償のはざれば必らず其所を出ること能はず」(馬太五の二十六)と云ふが如きは斯る語なりとす。併し乍ら此の辭は譬喩または借喩の性質を帯ぶる者にして、其之を用ひたるは罪惡の中心に望を注入せんためには決してあざりし。されば吾人が言ひ得る限りは只是のみ。——吾人は現在の狀態を超え出たる時には此光陰の相續に當らん者は何なるかを知らず、故に刑罰の窮盡なきを教ふるが如く見ゆる言語をも推切ては斷定するを得ず。我等は其の知る所の神の性質を推して確信す、神は何人をも其必要なるより多くは罰したまはじ、何人をも其罰せらるべき期より一刻も長くは罰したまはじ、若し何時にもあれ地獄にをる靈魂驕然として悔いて神の愛徳と聖潔とに反抗することを止めなば、其靈魂は其かつて罰せられたるごとく今は罰せらるゝこと止まん。且又神は罪人の死を悦びたまはざる者なれば、淪亡者を挽回することにして若し能くし得べくんば、必らず之を挽回するに力を盡したまはん、而して彼等が受け得べき有ゆる處分の中にて其が地獄にて受くる刑罰ほど斯る目的(彼等を挽回する事)を助成するに善き者は無からん。諸かく種々に言つて之を見るに、左の事實は則ち滅却すべからず、依然として存す、曰く、聖書中にては此世は善惡の品質を定むるの處と見做さる、——大末日の審判は絶對および終結なる者と稱せらる、——其時罪に定めらるゝ者の境界は其時義とせらるゝ者の境界と對峙せしめられて、其一(彼)は其二(此)よりも期短かしとは少しも暗示だにせられたる者ある無し。

第九節

教會の教義と聖書の教義とは此に我等を遣して去る。今其示せる所に依て之を言へば、惡は絶對的に善と甄たれり、最はや何の善惡をも爲すを得ず、而して惡は——強逼に由らず道徳上の手段に由て——己れの固有の惡弱なることを感ぜしめらる。惡は遂に善に服せしめられ、而して其服したることを自ら認識す。夫の「天の處に」ありて人生の活劇を窺がひ且之に由て自ら益しつゝある謂ゆる「執政者」中(以弗所書三の十)若し初に於て善と惡との勝敗何如を疑がひをりし者あらば、今や此に至りて疑團氷釋せん。若し彼等の中貳心をいだきて首鼠兩端を持し、幾分かサタンの背叛に同情を表しをる者ありたらば、此に至りて懺悔して基督に由て歸順せん(哥羅西書一の二十)。衆聖徒が完全に救はれたるを見なば、疑團の影も無くならん、而して今まで疑がひ來れる者どもは衷心より悦服して寶座の前に俯伏して啞孟ととなふ(默示録七の十二)。最はや毫も疑を容るべき餘地なし。惡は今まで有ゆる機會を有したり、而して全く失敗せり、其禍は夫の愛と聖とを犯して自ら惡に身を賣りたる人々の頭上に跳かへれり。

我等の知るべき所は是にて足れり。此上に尙起るべき事ありとも、そは我等が教へられたる所にあらず。「神が古へより聖預言者の口に托て言たまひし萬物の復興らん時」は則ち是れイエスが天より歸りたまふの時なり(使徒行傳三章二十一節)。キリストの「來り」たまふ時と夫の「終」との間には隔あるを示す文字等少しも無し、「終」の時とは即ち是れキリストが「諸の政および諸の權威と能を滅ぼし」、最後の敵たる死をすらも足下に踏み、「萬物を己れに服がはし、御父」に自から服がひて、「國を父の神に付し」、「神をして一切の物の上に王たらしめん」とする時を謂ふ者とす(哥林多前書十五の二十四——二十八)。キリストの再臨、死者の一般復活、及び大審判は現在に

おける其基督教會の眼界を限り、而して天國と地獄とは朦朧として前途に横たはれり。未だ示されざる或る將來に於ては、惡は最はや單に其應報を蒙むる者として顯はさるゝ事なく、全く抜き去られて消滅せしめられんも知るべからず。若し然るにもせよ、其然か成るべき方法は吾人の知らざる所なり。惡に斷乎として尙固着しをる者どもの滅絶するは、善の勝利とは恐くは見えず、却つて失敗の告白としも見えん。サタンとサタンの眷屬（後者をば論理上前者と離すべからざる故）を醫し、而して再び惡をしてサタンが嘗て之を喚び出せし純然たる想念境に歸住せしめてこそ、茲に始めて惡の廢棄てふ吾人が觀念を満足せしむるを得べけれ。斯る感化は神の力の能はざる所にはあらじ。此事は必ずしも惡人をして其晚くして入る能はぬ福境に強て入らしむる者に非ず。然りと雖も斯く萬人の身中より悉く終に惡を淨め去るといふが如き事を信仰の一箇條として教ふるは、輕躁の極と謂ざるを得ず。縦し聖書の精神には悖らざるにもせよ、是れ聖書の文字とは殆んど一致せしむる能はず。又其が聖書の文字と一致せんことを望むをも要せず。吾人が現在に要する所は左の件々を信するを得ば足れり、曰く公義は必らず施こされん、——長大戰爭の勝敗は終に曖昧ならじ、——善と惡との間に於ける戰鬪は互に勝負なきが如き者にはあらじ、或は其戰鬪たるや善が僅かに克ち惡も愧づべからざる負をなせるが如き者にはあらじ。惡の敗亡は、其形は如何なるにもせよ、完全なる敗亡なるべし、毫も遺憾なかるべく、敵の手には最はや一物も遺らざるべし。神は神の力に愧ざる大大勝利を得たまはん、而して神の贖なはれたる子どもは之を見て満足せん。

福音の道 正誤 Eryata

十四頁九行目「肅んで感ず」ノ下「之を忽諾にしたる時は心樂しませず」ヲ脱ス
 十七頁七行 solviter & solvitur ノ誤

第十九頁「然し乍ら神は」ノ上ニ「但し神と他の一切の生物（其性質の最も神に似たる者すらも）との間には左の一大逕庭ありて存す、——即ち後者は起原を有す。」ヲ脱ス

二十六頁九行目（詩三十九篇）は（詩百三十九篇）の誤

三十六頁十行目（希伯來書十二の二十九）ヲ脱ス

四十二頁第七行「第三章」ハ「第三節」ノ誤

七十七頁末行（Leistourgika）ハ（Leitourgika）ノ誤

百四頁十三行目ノ初ニ「第十節」ヲ脱ス

百十頁一行——（第一節）ヲ脱ス

百三十頁十七行——「靈と魂」は「靈と體」ノ誤

百八十三頁十三行「キリストの死は」ノ上ニ（第十九節）ヲ脱ス

二百〇三頁（使徒行傳十六〇七）ヲ脱ス

二百〇八頁六行目「之を指點するは難し」ハ「之を指點するは難からず」ノ誤

二百三十六頁二行目「而して是また預じめ歴史に誤られたる者なりき」ハ「而して是また預じめ歴史の否定する所なりき」ニ作ルベシ

二百六十九頁「聖ベウロ」ハ「聖バウロ」ノ誤

二百九十一頁末行ヨリ二行目「想像するを要せず」ハ「想像するを要せず」ノ誤

三百〇一頁八行（羅馬書八章二十六）ヲ脱ス

三百二十八頁四行「宛かば」ハ「宛がら」ノ誤

三百四十二頁八行（路加傳三十三章四十三）ハ（路加傳二十三章四十三）ノ誤

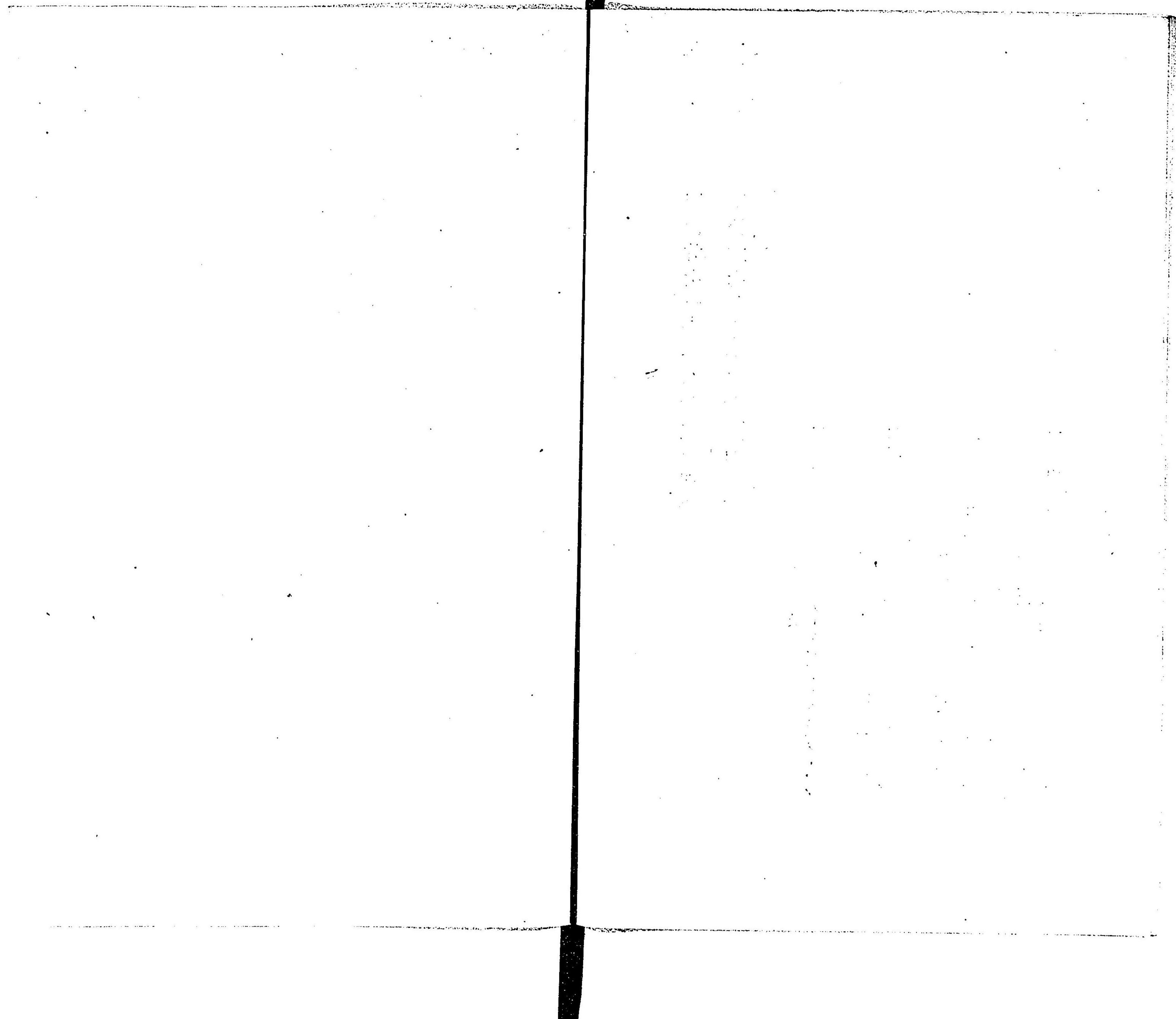
明治廿七年十一月廿二日印刷
明治廿七年十一月廿五日發行

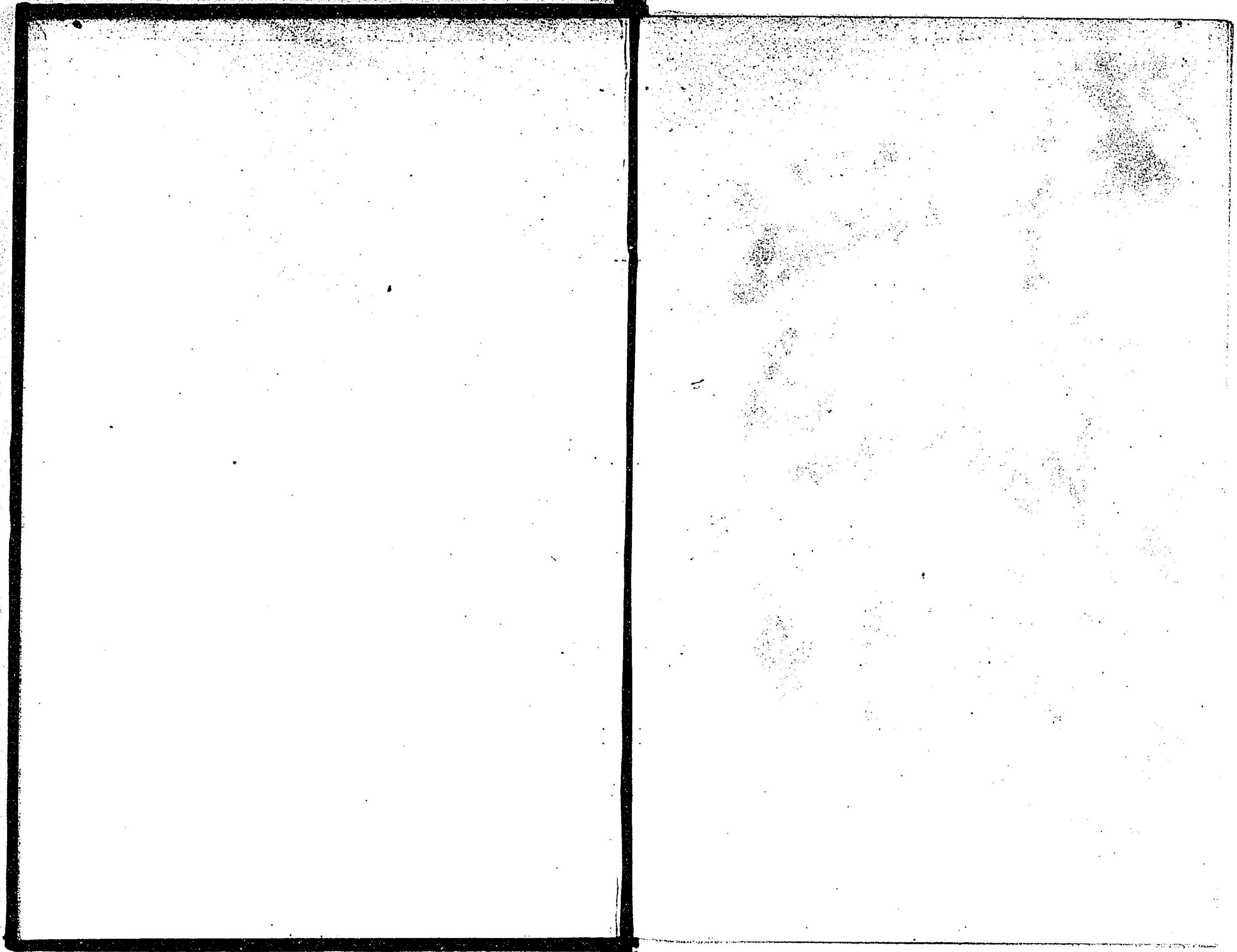
原著者 英人
アーサル、シエムス、メーソン

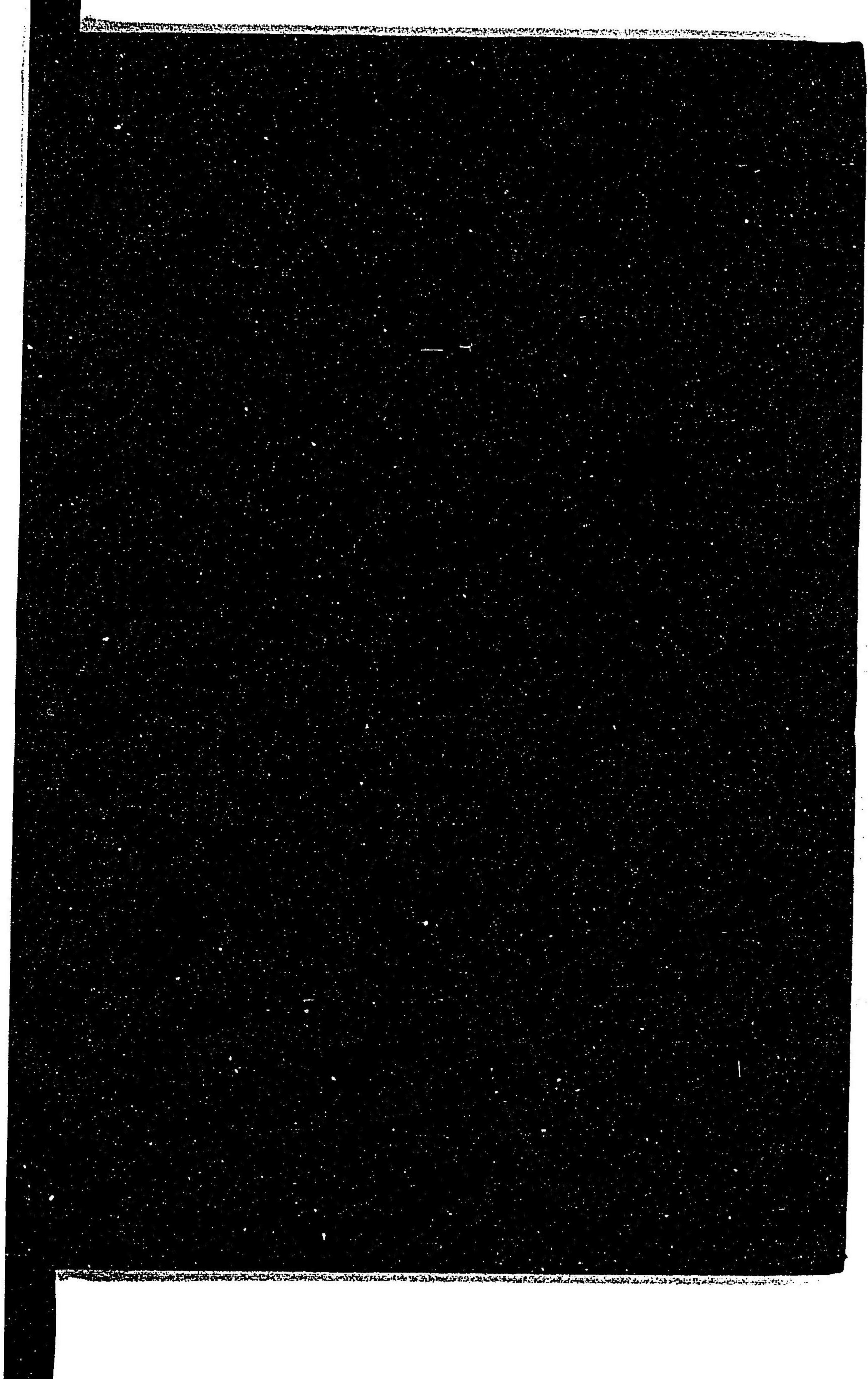
翻譯兼發行者 東京市芝區三島町十二番地
高橋五郎

印刷者 東京市京橋區西紺屋町二十六番地
佐久間衡治

印刷所 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
株式會社 秀英舍







021229-000-1

特18-939

福音之道 一名, 基督教理提要

アーサル・ジェムス・メーソン/著

M27

ABI-1113



